

実践報告 (Report)

自分の命について考える道徳の授業

——生と死のふたつのアプローチから——

**A moral education lesson about life :
An approach using two activities on birth and death**

山田 真紀
Maki Yamada

摘 要

本稿は、自分の命のかけがえのなさを知ることのできるふたつの授業の実践記録である。ひとつは「死」から命について考える授業であり、子どもを亡くした母親たちの深い悲しみと苦しみを描いた映像を見て、死が家族に与える衝撃を知ることから自分の命のかけがえのなさを知るものである。もうひとつは「生まれる」「生きる」という「生」から命について考える授業であり、幼いころの写真と親へのインタビューをもとにしてお誕生カードを作成し、友達と共有するなかで、自分も友達も望まれて生まれ、愛されて育てられた大切な存在であることを知る実践である。また本論では多様な命の授業を、「自分」「他人」「動植物」の3つに区分してとらえ、自分の命と他人の命は関係していること、人間の命と動植物の命は関係していることの関係性について発展させていくことの重要性についても論じている。

キーワード：道徳，命の授業，教員養成

Key words : moral education, lesson plan about life, teacher training

1. はじめに

現代の日本では、「命のかけがえのなさや尊さ」という当たり前にも思えることを、改めてきちんと教えていかなければならないと感じさせる状況に満ちている。

第一に、「死者は生き返る」と信じている子どもが少なくないということである。2005年に長崎県教育委員会が県内の小学4年生と6年生、中学2年生の約3600人を対象に実施した調査によると、「死んだ人が生き返ると思いますか」との問いに、小学4年生の14.7%、小学6年生の13.1%、中学2年生の18.5%が「はい」と答えた。その理由として、「テレビや本で生き返る話を聞いたことがあるから」「テレビや映画で生き返るところを見たから」が多く、「ゲームでリセットできるから」と答えた子どもも7.2%いたという¹。

第二に、日本は自殺率が高いということである。世界の自殺率ランキングにおいて、

日本は常に10位以内に位置しており、最新の平成22年のデータによると人口10万人あたりの自殺者数は24.9人となっている²。自殺は10～14歳の死因の第3位、15～19歳では第2位、そして20～39歳では第1位となっており、若年者の自殺も深刻な状況にあることがわかる³。もちろん若年者が自殺に追い込まれる状況自体を問題にしなければいけないわけであるが、「自分で自分の命を奪う」という結末を選ぶことのないように私たちは働きかけなければならない。

それでは、学校教育のなかでいかに「命のかけがえのなさや尊さ」を教えていくのか。学習指導要領では道徳の領域において、「生命の尊さを理解し、かけがえのない自他の生命を尊重する」意識と態度を育むことが目標として示されている⁴。それでは、道徳でどのような活動を行えば、この目標に近づくことができるのだろうか。本稿では、このような問題関心から筆者が「道徳の指導法」において行っているふたつの実践を紹介し、その効果を考察していきたい。

なお、「命」に関わる教育は、自分や他者の命、すなわち人間の命を扱うものと、動植物を含むすべての命を含むものが考えられるが、本稿では「自分の命」に焦点づけた実践を扱う。また「命」を浮かび上がらせるためには、それがなくなったときの状態や影響から命を逆照射する「死」からのアプローチと、それが生み出され、成長していく「生きる」あるいは「生まれる」という「生」のアプローチがありうる。そこで「道徳の指導法」では、まず1コマを使い、死からのアプローチの授業を行い、次に2コマを使って生からのアプローチの授業を行っている。

2. 死からのアプローチ

死からのアプローチでは、①死というのは存在が無に帰することで不可逆的な状態であるということを理解させる、②自分の死が周囲の人々、特に家族に深い悲しみと苦しみをもたらすということを理解させる、ということが大切である。この授業では、子どもを事件や事故で亡くした母親が登場し、その悲しみと苦しみと向き合いながら、なんとか前を向いて生きていこうとする姿を追ったドキュメンタリー(映像教材)を用いる。このドキュメンタリーは、NHKの教育番組「道徳ドキュメント」から得たものであり、現在はDVDとして公刊されている。授業の流れは以下の通りである。

時間(分)	内容	詳細
00～05 (5分)	導入	今日は映像教材を見て以下のことについて考えます ・「死」とは何か。どういう状態なのか。 ・「人の死」は周囲にどのような影響を与えるのか。
05～20 (15分)	映像の視聴	道徳ドキュメント③「人とつながる」に収録されている「命の大切さを伝えて」を視聴する。
20～40 (20分)	ワークシートの記入	ワークシートの内容は下記の通り

40～65 (15分)	班別討論	ワークシートの3について考えを発表しあう
65～75 (10分)	授業のまとめ	① 授業の意図 ② 死を扱う授業をするうえでの留意点
75～85 (10分)	諸連絡	① 宿題のやり方 ② 次回の授業に関する伝達事項

(ワークシートの内容)

1. 内容理解

- ① 幼くして亡くなった娘のオブジェを涙しながら作る母親が登場しました。なぜこの母親はこの展覧会に参加することを決めたのでしょうか。
- ② あなたは鈴木さんをどのような人だと思えますか。どんなところが共感できたり、尊敬できたりしますか。

2. 自分の考えをまとめる

このビデオを見てあなたは何を感じ、考えましたか。

3. 授業者の立場に立ち、この教材を考察する

- ③ この教材を通じて、子どもたちに何をどのように伝えたいですか。
- ④ この教材を使う上で、配慮しなければならないことはどのようなことですか。

4. 宿題コーナー

- ⑤ 次の映像を見て、考えたこと、感想などを自由に書いてください。

「たったひとつのたからもの」You Tube で検索

「最後だとわかっていたなら」You Tube で検索

「ある少女の選択」NHK クローズアップ現代の HP 内で検索

- ⑥ 上記の4つの映像教材を用いて、授業を組み立てるとしたらどのような授業にしたいですか。流れを書いてください。

「道徳の指導法」は教職履修者のための授業であるため、道徳の授業としてなぜこの授業を行うのか、という観点から受講生の理解を引き出すことが大切である。そのため、授業のまとめでは、以下の3点に言及する。第一に、死というのは存在が無に帰することで不可逆的な状態であることを子どもに理解させること。決して、ゲームのようにリセットできたり、フィクションのように死者が蘇ったりすることはない、という事実を伝えること。第二に、「死」というのは個人的な出来事であるだけでなく、周囲の人々を悲しませ、苦しめるものであること。「自分が死んでしまったら親はどう思うだろうか」ということを想像させるとともに、さらに「友達が死んでしまったら友達の親はどう思うだろうか」ということも想像させ、自分の命がかけがえのないものであることだけでなく、自分以外の他者の命もかけがえのないものであることを、実感をともなった形で伝えていくことが大切である。第三に、「死」という重た

いテーマを扱ううえでは、配慮も必要である。もしクラスに、最近家族を失う経験をしたり、重篤な病をかかえた家族がいる家庭の子どもがいたりする場合は、この授業は取りやめたほうがいいこともある。またそのような子どもがいない場合も、事前に保護者に対して、授業の計画と意図について伝達し、理解を求めておくことも、トラブルを避けるうえで、または家庭とも連携して学びを深めていくうえでも大切なことである。

この授業では、宿題コーナーとして、関連する映像教材の紹介も行っている。第一は、明治安田生命のテレビコマーシャルとして話題になった「たったひとつのたからもの」である。これはダウン症児として生まれた秋雪くんの6年の人生をまとめたビデオクリップであり、障害をもって生まれたとしても、両親にとって秋雪くんはかけがえのない、いとおい、大切な命であったことが感動とともに伝わってくる。第二は、アメリカのノーマ・コーネット・マレックという女性がわが子を失ったときに書いたとされる詩を映像化した「さいごだとわかっていたら」である。愛する家族とともに過ごせる平凡な毎日こそがかけがえのない奇跡であり、素直に気持ちを伝えあうことの大切さを感じさせてくれる映像である。そして第三は、延命治療を拒否し、自宅で18年の生涯を終えることを選んだ華子さんと、家族の葛藤を描いたドキュメンタリーである。学生には、これらの映像を見て、感じたこと、考えたことを論述してもらおう。さらに、この授業で紹介した4つの映像教材を使って子どもたちに道徳の授業をする場合、どのように授業を構成すべきかについても考えてもらおう⁵。この授業は、「自分が死んでしまったら親はどのような気持ちになるのだろう」「自分の子を失うなんてどんなにか辛いことだろう」ということを考える時間となるため、学生は一樣に暗い気持ちになる。そこで、来週からはじまる「生」についてのアプローチについて説明して、授業を締めくくる。

3. 生からのアプローチ

生からのアプローチで行うのは、自分がどのように生まれ、どのように生きてきたかを振り返る「お誕生カード」の作成であり、2コマを用いる。作成に先立ち、学生には以下のものを準備させる。①生まれてから3歳くらいまでの写真を数枚（家族とともに写っているものを含めるとよい）。②家族へのインタビュー。インタビュー内容は「出生時の身長と体重」「名前の由来」「生まれた時にどんな気持ちだったか」「乳幼児期にどのような子どもだったか」の4点である。写真はカラーコピーしてくるように指示する。また、カラフルなカードに仕上げるために、必要に応じてカラーペン、折紙、のり、はさみを準備させる。授業者は、台紙となるA4のカラー用紙と、クラフトパンチを数種類準備しておく。

1コマ目では、学生は準備してきた写真とインタビューデータを用いて、自由にお誕生カードを作成する。作成にあたっては、次の時間にカードを友達と見せ合う時間

をもつことをあらかじめ伝えておき、他人の目に触れても差し支えない内容にしてもらう。また、カードをラミネート加工することから、「厚みのある装飾はしない（コピー用紙5枚を重ねた厚みを超えない）」「A4の台紙からはみ出した装飾はしない」「消えるボールペンをうけない」の注意事項を伝える。90分の授業を作成にあてるが、作成に熱が入り、ほとんどの学生が折紙やイラストで装飾しながら仕上げていくため、時間内に完成する学生は1割程度である。未完成の学生は、来週までに完成させてくることになる。

2コマ目は以下のように進める。

時間 (分)	内容	詳細
00~05 (5分)	導入	本時の流れの確認 配布係による配布(ラミネートシート・寄書用台紙・レポート課題プリント)
05~45 (40分)	ラミネート 寄書タイム	班ごとに順番にカードにラミネートをかける。 ラミネート待ち時間を用いて寄書を行う。
45~60 (15分)	授業のまとめ	① 授業の意図 ② この実践を行ううえでの留意点
60~85 (25分)	次回の授業 の導入	課題プリントの黙読 レポート構想

2コマ目では、①できあがったお誕生カードが半永久的に美しいままで保存できるようにラミネート加工をしていくとともに、②受講生同士でカードを交換して、フィードバックをしあうという活動を行う。ラミネート加工は学生自身が行うため、あらかじめラミネーターの使い方の注意事項を伝えておく。「必ずシートの閉じている部分を最初に差し込むこと」「A4のガイドラインを参考に平行になるように差し込むこと」「冷えるまでは平らな場所で平らになるように置いておくこと」の3点である。授業者はラミネーターの傍らにたち、受講生全員のお誕生カードを見て、コメントをしていく。ラミネーターは受講生が50人以下であれば1台、50人を超える場合は2台準備する。ラミネーターが2台あると時間を短縮できるが、授業者が全員のお誕生カードをみてコメントをするのが難しくなるという難点がある。

ラミネート加工を待つ時間を用いて、お誕生カードを受講生同士で見せ合い、コメントを書きあうという活動をする。あらかじめA4の長い辺をカットし、正方形にした色用紙を準備しておき、見本のような色紙を作ってもらおう。「15名以上からコメントをもらうこと」と目標を定め、積極的に活動に参加してもらおうようにする。なお、以前は教員もコメント書きに加わり、学生から喜ばれていたが、教卓の前に順番待ちの列ができてしまうこと、全員にはコメントできず不公平感が残ることから、ラミネートする際に全員のカードに口頭でコメントするやり方に切り替えた。

次頁にお誕生カードの例と寄せ書きシートの例を掲載した。学生の作るお誕生カー

ドは手書きでかわいらしい装飾が施されており、一例としてぜひとも現物を掲載したかったのであるが、カードには個人情報満載であり、不特定多数の人の目にさらされるこのような媒体には不向きだと考え、筆者がイメージを作成した。

授業の最後には、以下の4点に言及してこの活動を締めくくる。第一に、この活動は改めて親と自分の誕生について話す機会を与えるものである。学校の課題として課されない限り、なかなか自分が誕生したときのこと、幼いころについて話を聞く機会は少ないであろう。きれいに整理されたアルバムを見たり、嬉しそうに生まれたときのことや幼いころのことを話す親に触れることにより、改めて自分は望まれて生まれ、愛されて育ったことを実感することだろう。そしてこのプロセスこそが子どもたちに自分の命の尊さ、かけがえのなさを伝えてくれるのである。

第二に、友達のお誕生カードを見てコメントする活動は、ラミネートの待ち時間を埋める以上の意味があるのであり、自分は家族に愛されて育った大切な命であるのと同じように、友達もその家族に愛されて育った命であるということに気づく契機となる。このような想像力をもつことは、いじめや差別の抑止力となる。

第三に、この実践を行ううえでの留意点である。写真を準備できない子ども、あるいは親にインタビューができない事情のある子どもがいる場合は配慮を要する。学級担任であれば子どもの特殊な事情はあらかじめ把握できているはずなので、事前に保護者と連絡をとり、活動の趣旨を説明するとともに、写真がどの程度準備できそうか、インタビューに親や親せきがどの程度協力できそうかについて確認しておくことが大切である。この活動を通して子どもが「自分だけが恵まれていない」という疎外感や孤独感を感じることを決してないように細心の注意を払う必要がある。

大学の場合、全受講生の家庭的背景について把握することができないため、活動



お誕生カードの例

ん。声が聞きたい、抱きしめたい、顔が見たい、これは死んでしまっただけではかなわぬ願いとなるのです。人は誰でも自分のことを大切に思い、愛してくれる人がいると思います。その人たちに深い悲しみを味あわせないためにも、自分の命を大切にしていかなければならないと感じました。そして、事故や病気で生きられなかった人にとって、私が生きている今日が、生きたいと願っていた今日なんだということも感じました。このように考えると、1日も無駄にすることはできないと思います。

「お誕生カード」の授業では、作成するにあたって私は母と父にインタビューをしました。今まで名前の由来や生まれたときの状況を深く聞くことはなかったので、とても新鮮でした。話を聞くことができ本当に良かったと感じています。私は涙腺が弱いので、話を聞いているときに涙が出そうになり、照れくさくてごまかしました。なぜ私は涙が出そうになったのかを考えたところ、話を聞くことで、私がいかに話をしてくれている目の前の両親に愛されて育ってきたのかを直接感じ、心が温かくなったからだと思います。私は大学生になり、社会的には大人になりましたが、中身はまだ子どもであり、いま大人と子どもの中間にいると思います。小学生のころではなく、いま大人として子どもを愛する気持ちが少し理解できるときに、親の私に対する思いを聞くことができ親の気持ちも理解することができました。私を産み、ここまで育ててくれた両親には感謝してもしきれません。また友達のお誕生カードを見ることで、それぞれの家庭での愛が伝わってきて心が温かくなりました。私たちはそれぞれの親にとってナンバーワンであり、オンリーワンなのだと感じました。

〈学生レポート2〉

お誕生カードを作り、自分がどれだけ愛情や希望の上に生まれてきたのかわかった。今まで聞くことができなかった親の思いを聞くことができ、少し恥ずかしかったが、「生まれてきてくれた」という親の言葉に感動した。また、友達のお誕生カードを見ることで、みんながかけがえのない素晴らしい存在なのだということを再確認できたと思う。

私の弟には障害がある。19歳になっても親の助けなしでは自分のことができない弟を見ると、親は弟を産んだことを後悔したことはないのかなと考えてしまう。そんなことを考える私は最低だが、障害児ということが生まれる前に分かっていたら、私の親は弟を産んでいたのだろうかと考えたこともある。自分の誕生や成長を家族に聞いたとき、弟も私も同じように大切な存在だと言った。「二人とも生まれてきてくれて嬉しかった」と言った母に対しても、私たちが産んでくれてありがとうと思った。先生に紹介された「たったひとつのたからもの」という映像を見て、そんな気持ちを大切にしたいとも思えた。

子どもの虐待やいじめによる自殺など、悲しいニュースをよく耳にする。自分も人もかけがえのない大切な存在であると認めることは当たり前のように思えるが、難しいこともある。そういうことを当たり前と思える子どもを育てるために、まずは自

分が、自分のことも周りの人も大切にしたいと思った。

上記2つの学生の感想は、授業者の意図を肯定的に受け取ってくれたレポートの例である。一方で、これらの活動を複雑な気持ちで受け止めていた学生もいないわけではない。これまで次の3つの事例において、学生が複雑な気持ちを吐露していた。第一に、親を亡くした経験をもつふたりの学生の事例である。ふたりとも、大切な肉親を亡くす苦しみについて扱う映像が、その当時の自分の気持ちと重なってつらかったと述べている。さらに、次に続くお誕生カードの実践では、自分の生まれたときの気持ちを亡くした親には聞くことができないのであり、寂しい気持ちが続くことになってしまう。第二に、家庭環境が複雑な学生の事例である。幼い時期の写真や親のインタビューを準備できない事情があったため、代替案でカードを作成することになったが、幸せそうにカードを作る周囲をみて、孤独感やみじめさを感じたといい、さらに、人とは異なった内容のカードを友達と見せ合う時間には、特別な事情があるということ、特に親しいわけでもない他の受講生に公開することになってしまった。第三に、親との関係が悪く、精神的な問題を抱えている学生の事例である。自殺願望のある学生であり、「死」へのアプローチの授業では、「死にたい病のわたしだけれど、生きてくても死ななければならなかった人に申し訳ない気持ちにもなった。これからはもう少し自分の命を大切にしようかな…」と気持ちに揺さぶりをかけられたことを告白していた。この事例では彼女なりにこの授業をポジティブに受け止めようとしてくれたが、命の大切さを本当に伝えなければならない者に対しては、このような単発の授業実践では効果は十分ではなく、長期にわたるカウンセリングの関わりが必要であることを痛感させられた出来事であった。

5. おわりに

自分の命をないがしろにする「自殺」、他人の命をないがしろにする「いじめ」。学校現場でどのように命のかけがえのなさ、大切さを教えていくか、今、真剣に考えなければならないことである。本稿では、単発で行うことのできる、本人たちの命に直接向き合うことのできる2つの事例を紹介したが、さらなる展開として次の3点に言及したい。第一に、道徳の時間に単発で取り入れるだけでなく、年間を通して、学年段階に応じた構造的な命の学習のプログラムを作ることである。魚や小動物の飼育や植物の栽培を含め、長期的に、かつ体験的に命に触れることのできる環境を整えることが大切である。第二に、本人たちの命に直接向き合う授業から、他人の命も大切に授業へ、そして人間以外の動植物の命も大切に授業へと範囲を広げていくことである。筆者は命の授業を「自分」「他人」「動植物」の3つに区分してとらえることが大切だと考えている。自分の命を大切にできない人は他人の命を大切にできないのであり、人間の命を大切にできない人は他の生物の命を大切にできないと考えるた

めである。そして自分の命と他人の命は関係していること、人間の命と動植物の命は関係していることの関係性について発展させていく。この分類枠組みを用いれば、「ペットショップで売れ残った動物たちが殺処分される現状について学ぶ」という授業は、人間の経済活動による身勝手な事情により命が失われる現状を知るものであり、それは動植物の命について考える授業であると位置づけられる。また、「ジャガイモを収穫し、鶏をしめて食事として食べる経験から、私たちは動植物の命をいただいて命をつなぐことができていることを学ぶ」という体験授業は、人間の命と動植物の命の関係性について学ぶ授業であると位置づけられるだろう。

命のかけがえのなさや大切さを知る授業というのは、「自分らしくいきいきと生きる」「お互いを尊重し、穏やかな人間関係を育む」「生物の多様性を尊重して、美しい自然環境を次世代に残していく」ということの基礎になるものである。今後、ますます効果的な実践が開発・蓄積されていくことを願っている。

■注

- 1 長崎県教育委員会編『児童生徒の「生と死のイメージ」に関する意識調査』平成17年1月24日。<http://www.pref.nagasaki.jp/edu/gikai/contents/teirei/200501/isikityousa.pdf>で閲覧可能（平成25年1月10日接続確認）
- 2 警察庁生活安全局生活安全企画課『平成22年中における自殺の概要資料』<http://www.npa.go.jp/safetylife/seianki/H22/jisatsunogaiyou.pdf>で閲覧可能（平成25年1月10日接続確認）
- 3 文部科学省『教師が知っておきたい子どもの自殺予防』平成21年3月。第一章「子どもの自殺の実態」2頁。http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_jcsFiles/afieldfile/2009/04/13/1259190_4.pdfで閲覧可能（平成25年1月10日接続確認）
- 4 項目3の「主として自然や崇高なもののかかわりに関すること」のなかの1番目に登場する。学年段階によって文言が多少異なる。
 - 小学校低学年「生きることを喜び、生命を大切にすることを学ぶ。」
 - 小学校中学年「生命の尊さを感じ取り、生命あるものを大切に学ぶ。」
 - 小学校高学年「生命がかけがえのないものであることを知り、自他の生命を尊重する。」
 - 中学校「生命の尊さを理解し、かけがえのない自他の生命を尊重する。」
- 5 宿題において「さいごだとわかっていたら」の映像を使い、子どもたちに「明日、地球が滅亡するとしたらあなたはどのように今日を過ごしますか」もしくは「明日、あなたは死ぬかもしれない。それがわかっていたらあなたはどのように今日を過ごしますか」という発問をして授業を組み立てるといったアイデアを書いてくる学生がいる。「明日、子どもが死ぬ」ということを主題として想定する授業は不適切であることを伝える必要がある。